山上憶良論

―万葉集を代表する家族愛に満ちた山上憶良の生き方や文学観を探る―

View of Okura Yamanoue
—Quest to understand his views on literature and life filled with love for family—

長友　武

初めに

万葉集研究を始めて以来、この山上憶良に対し他の歌人とは異なる感情を懐き続けてきた。他の歌人達が叙景歌に優れていたりするのに対し、憶良は人間社会に宿命的課題として、つきつけられていた生病老死、それに人間社会の生き様を逃避することなく受け入れ、それに対する苦悩を自然に吐露している。つまり人間の苦悩の極限を旨く歌にして表現している歌人である。

彼の人生に於て遭遇した出来事、また、当時「遠の朝廷」と言われた九州の太宰府での大伴旅人との交流や「筑前国志賀白水郎歌十首」、「日本挽歌五首」に見られるように、人生の苦境に立った人の立場になって歌を詠んでいる。これらのことは近代の作家達に共通するフィクションの世界での文学の確立にも共通する姿勢が伺われる。七八年余りの生涯に残した、長歌十一首、短歌六十四首、旋頭歌一首、合計して七十六首の代表的な作品を彼の生涯の流れに添って私なりの解釈を加えて、彼の人生がいかなるものであったかを探りたい。また中西進氏の大胆なる推論「山上憶良は帰化人の子孫」とする見方も参考にしながら、彼の年譜をもとにして述べてみたいと思う。また歌を通して「山上憶良」の人間像についても私なりの感想を述べてみたい。

Ⅰ　山上憶良の時代と人生

万葉集巻五の「沈痾自哀文」を参考にすると、ここに「是時年七十有四」と記してある七十三、四才の年令である。この「沈痾自哀文」が書かれた年が天平五年だから、そこから逆算してゆくと大凡の生れた年が想像できるわけである。出生は斉明六年（西暦六六四年）で、この年はいかなる年かと言えば朝鮮半島に於て、唐と新羅の連合軍が百済に攻め入り、百済を援護していた日本・百済の連合軍を白村江の戦いで打ち破り、百済を滅亡させた年でもある。この戦いの後、天智天皇は近江に都を遷都し、白村江の戦いの戦傷を忘れさせる程の近代化を進め、国家の基礎を築いた古代史上、重要な時期であった。

その頃、山上憶良はこの世に生を受けた。天智天皇死去の後、壬申の乱の後、天武、持統、文武と続き、律令国家体制に日本は移行してゆくわけであるが、山上憶良が正式に正史に名前を出してくるのは大宝元年、四十二才の時である。勿論、大伴旅人などの上級の官僚とは異なるのでこれも当然のことなのであるが、事実はそうである。残された歌などから推察して下級官僚としてその宿命に身をゆだねなければならなかった彼の苦悩がにじみでている。中西進博士は山上憶良が百済から、白村江の戦いの帰化人であると推察して

宮崎公立大学人文学部紀要　第９巻　第１号

おられる。帰化系の白丁・写経生→大舎人→一般官人か、大舎人→写経所出仕→一般官人の二つの官僚のコースをたどった可能性があると指摘しておられる。確かに、山上憶良の残した歌や史書の中に帰化人やそれに類する言葉は見当たらないけれども、前にも述べたように、人生の苦悩や尽きることのない家族や周囲への人間愛を高らかに歌いあげた、万葉集の異色の歌人の出生は異文化を進んで理解し、許容し得る帰化人系統のそれではないかと推察できるのである。このことは四十才を過ぎて、遣唐使の一員として大国の唐に渡り、文学のみならず、儒教、仏教をも学び、初唐から中唐に於ける文化人達とも進んで文流をし、それらを歌の世界に旨く取り入れたわけで、その進取の気性に富んだ行動も他の歌人とは異なるわけである。

確かに官僚としての地位は低かったものの、持統四年、川島皇子の家庭教師的仕事として紀伊行幸に同行していたり、また、神亀三年、憶良六十七才位の時に、約二年間、筑前の国守として、太宰府に赴任し、生涯の友とも言うべき、太宰府の帥・大伴旅人との「梅花の宴」などでも伺われる文学者同士のまた人間的交流も楽しんでいることが分る。

山上憶良の簡単な履歴をここにまとめてみる。正確な資料は万葉集や続紀しか見当たらないわけであるが次のようになる。

(1)斉明六年（西暦六六七年）誕生

(2)大宝二年、遣唐使として渡航する。彼の年令で四十三～四十八才まで六年間の留学

(3)和銅二年（西暦七〇九年）、正六位下から従五位下に昇進する。彼の年令で五十五才

(4)霊亀二年、五十七才の時に伯耆守に任命さる

(5)養老五年（西暦七二六年）、東宮（皇太子）の侍講者として任命さる。東宮に和歌を指導する家庭教師的仕事である。分類和歌集である「類聚歌林」をこの頃編纂。

(6)神亀元年（西暦七二五年）、仕えていた東宮は聖武天皇として、天皇となる。憶良六十七才で筑前守として、九州の太宰府に赴任。この地で二年程遅れて太宰府の帥として赴任してきた大伴旅人とめぐり会い、親友以上の関係となる。「沈痾自哀文」などからすると「宿痾」なる病に常に悩まされ、痛みをこらえての赴任であったらしい。「宿痾」なる病は現代病で言えば、「関節リュウマチ」とも呼ばれている病で、現代の難病とされている。

(7)天平三年（西暦七三一年）、都に帰任する。辞世の歌が、「山上臣憶良沈痾之時謌一首」（万葉集六・九七八）である。天平五年、七十四才の生涯であった。

Ⅱ　代表的な歌と彼の人生

前にも述べたように、万葉集の他の代表的歌人達が、恋心や大和地方の美しい風景を歌ったのに対し、憶良が歌の中で追究したのは人間が本来持ってきた家族への尽きることのない愛情、また人間社会での善悪を規立する倫理観を歌いあげていることである。本人の持病の「宿痾」での苦しみや、愛する子供との死別、また下級官史の生活の苦しさ、それからの脱却、まるで明治から近代にかけての作家達の苦悩にも類似し、我々にも共感を持たせる歌人である。

万葉集に記載されている憶良の代表的な歌を解釈してみると次の通りである。

○　白波の浜松が枝の手向草幾世までにか年の経ぬらむ（一には「年は経にけむ」といふ）　（巻一・三四）

この歌は天智天皇の第二皇子の川島皇子の歌の指導役として、川島皇子の紀伊行幸に随行した時に、皇子の命により、謀殺された有馬皇子のことを偲び、「有馬皇子の心情を察して作歌」を命じられての作と思われる。詞書には次のようにある。

紀の国に幸す時に、川島皇子の作らす歌或いは「山上臣憶良作る」といふ、日本紀には「朱鳥の四年、庚寅の秋九月に、天皇紀伊の国に幸す」といふ

以上のように、この歌の由来、川島皇子の命により歌ったことが分り、宮廷歌人として、柿本人麻呂ではなかったにせよ、地位を築いていたことが想像できる。

○　いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ　（巻一・六三）

この歌には次のような詞書が添えてある。

山上臣憶良大唐にある時、本郷を憶ひて作る歌

とある。四十を越して、当時の大国の唐に留学していた憶良にとって、日本への望郷の念がいかに強かったかが想像できる歌である。この歌の「大和」は奈良地方の意味ではなく日本そのものの総称と理解すべきで、当時の留学生達がいかに日本への安全な帰国を望んでいたかが分る歌である。さあ、留学生達よ、大阪の難波の大伴の浜の松並木が君達の安全な帰国を待っているから、さあ出発しよう。いざとかけ合い言葉で歌を始め、浜松が待つとかけ詞を使って、単純な歌の中にも憶良の気持ちが現代人によく伝わってくる歌である。

○　憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ　（巻三・三三七）

詞書に、宴を罷る歌一首とある。この歌は憶良の歌の中でも有名な歌であり、彼の家族に対する愛情を限りなく歌いあげている。現代のサラリーマンの夜の宴会での辛さにも共通している気持をユーモアに満ちて歌いあげている。「憶良ら」、「罷らむ」、「子泣くらむ」、「待つらむぞ」、以上のように、リズミカルで軽やかな言葉「ら」を何回も使用することによって、笑いの中に真実の家族への愛情に迫っている。

さらに、憶良の家族への愛情を歌った歌としては次の二首の反歌があげられる。

○　ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りて業を為まさに　（巻五・八〇一）

○　銀も金も玉もなにせむに勝れる宝子に及かめやも　（巻五・八〇三）

これらの歌に共通することは長歌のあとに、さらに付け加えるようにして反歌として、さらに気持が歌われている。前の八〇一番に於ては、「父母を見れば尊し、妻子を見れば、めぐし愛し世の中はかくぞ道理・・・・。」と父母の偉大さをまた、妻子の可愛らしさが最高だと、またこのような気持は当然のことと言っており、八〇一番の

反歌に於て、「自由に飛びはねる天路はないので、素直に家に帰って家業に励みなさい。」と家業や家庭を大切にと、まるで家庭崩壊の危険性が叫ばれている現代の我々に警鐘を鳴らしているような気のする歌である。また、八〇三番の歌に於ては、次のような八〇二番の長歌、

○　瓜食めば子ども思ほゆ　栗食めばまして偲はゆ　何處より来りしものそ　眼交にもとな懸りて安眠しなさぬ

（巻五・八〇二）

つまり、旅先などで、瓜を食べると子供のことが思い出される、栗を食べるとイガ栗頭の子供が思い出されてならない。一体、子供というものはどこから来たのであろうか。目の前にしきりにちらついて安眠できない。との気持を歌い、八〇三番の歌を導き出している。

この八〇三番の歌は銀も金も玉も（当時高価な装飾品であったのであろう。）一体何になりましょう。最高の宝は子供なのだ。このように子供に対する最高の愛情表現を取っている歌は万葉集には他に見ることができない。

このような山上憶良の子供への愛情は次の子供の死を歌った挽歌でもよく表現されている。次の二首の挽歌は万葉集の他の挽歌より優れ、子供への父親の愛情の深さが伺える。

○　若ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ

（巻五・九〇五）

○　布施置きてわれは乞ひのむあざむかず直に率去きて天路知らしめ

（巻五・九〇六）

九〇五番の前に九〇四番の長歌があり、長歌の前に次のような詞書が記されている。

○　天平五年六月丙申朔三日成戌日作
恋男子名古日歌三首　長一首　短一首

とある。即ち古日という名前の男の子が幼児に死去し、その死を悼む歌三首とある。最愛の子供を亡くした悲しみはなかなか言葉には尽せないけれども、山上憶良はこの地獄の如き悲しみを三首の挽歌で表現している。

前の九〇五番の歌では、あまりにも二、三歳で死んだ子供は黄泉の国への道が分からないのではないのだろうか。父親の私は黄泉の使に非常識かも知れないが陰で賄賂を差し上げよう、そうしたら黄泉の使は私の死んだ息子を背負って黄泉の国に連れて行ってほしい、そうしたら父親としても安心だとの気持を歌いあげている。

また、九六〇番の歌では、相当な御布施を差し上げましょう。そして私はただお願いするだけです。どうか黄泉の使の人は私をだまさないで、私の子供の手を引いて黄泉の国への道を子供に教えて、つれて行って下さい。そうしたら父親としては安心します。そのように素直に子供を亡くした父親の悲しみを表現している。

このような憶良の歌は山上憶良が遣唐使として、唐に留学し、儒教、仏教的倫理観を体得していたからこそこのような評価すべき挽歌が歌われたのではないかと思われる。初唐の王勃という詩人が「裴録事の子を喪へるを傷む」という漢詩を作っている。この漢詩に山上憶良は唐に留学中に読んでいることが想像され、その漢詩に触発されてのことであったと思われる。またこれらの優れた挽歌は

百済からの帰化人から身を起し、困窮に喘ぎながら官僚の世界を生きて来た山上憶良の感受性の強さ、鋭敏さに起因するのではなかろうかと思われる。

彼が官僚としての苦しみ、また困窮な生活ぶりは次の歌でもよく理解できる。

○　世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

（巻五・八九三）

○　富人の家の児どもの着る身無み腐し棄つらむ絹綿らはも

（巻五・九〇〇）

○　荒栲の布衣をだに着せがてにかくや嘆かむ為むすべを無み

（巻五・九〇一）

万葉集の巻五の八九二～八九三にかけて、彼の晩年の作と思われるが、具体的に言えば筑前の守を辞し都に帰った頃、その頃の民衆の苦しい生活ぶりを見て、「貧窮問答歌一首」として貧苦の様を歌っている。

人間社会の中の解決をすることのできない貧苦に対し反歌として、世の中、つまりこの世の中をつらいとまた身が細るほどの苦しみを感じるけれども、自分に与えられた境遇・運命から逃れることはできない。なぜなら人間は、大空を自由に飛べる鳥ではないのでと、自由に大空を飛んでいる鳥に憧れの気持ちを抱きながらも人間社会の逃れることのできない苦しみを一種の山上憶良的諦観でもって受容している。山上憶良が現代のサラリーマン達から愛される理由もこの辺に由来すると思われる。

また同じように、自分自身の下級官僚としての苦しい生活や当時の庶民達の貧困の苦しみを、長歌一首、短歌六首、合計七首が八九三～九〇三番までの歌として歌われている。八九七番の長歌の詞書として、「老いたる身の重き病に年を経て辛苦み、及児等を思ふ歌」七首とある。山上憶良が、晩年になり、当時の社会や自分の今までの人生を回顧し歌ったものと思われる。本人も「宿痾」（関節リュウマチ）に苦しみ、人生の悲惨な時期を歌ったものと思われる。

九〇〇番の当時の社会の貧富の差が激しかったかが伺われ、貧しい苦しみに満ちた憶良の家庭から見て、豊かな家庭の子供に対する羨望が感じられる。富人（豊かな家庭）の子供は着る物ばかり多くて、着る体は一つなのに、腐らしてしまって捨て去っているという絹や綿の着物であることよ。それを貧しい家庭の子供達に恵んでやったらよいのにと豊かな家庭の現状を嘆き、貧しき家庭への同情の気持を歌いあげている。また、同じ気持を次の九〇一番に歌に於ても、荒栲の（繊維の粗い布地）の布で作った服すらも、子供に着せてやれずに、言葉に言い尽くせない窮状の中で子供を育てなければなりません。何もしてあげられずに。そのような貧困に喘いでいる様子がよく歌われている。

また「老いたる身の重き病に年を経て辛苦み、及児等を思ふ歌七首」と記されて始まる八九七番の長歌に於て、人生の死別、病苦、貧困の苦しみを次のように表現している。

○　たまきはる　現の限りは平けく　安くもあらむを　事もなく喪も無くあらむを　世間の　憂けく辛けく　いとのきていたき瘡には　から塩を　灌ぐちふが如く　ますますも

重き馬荷に　表荷打つと　いふことの如　老いてにある
わが身の上に　病をと　加へてあれば　昼はも　嘆かひ暮し
夜はも　息衝きあかし　年長く　病みし渡れば　月累ね
憂へ吟ひことことは死ななと思へど　五月蠅なす騒ぐ児ども
を　打棄てては　死は知らず見つつあれば　心は燃えぬ
かにかくに　思ひわづらひ　哭のみし泣かゆ
（巻五・八九七）

以上のように長歌の形で人生の最高の悲しみ、死別、病苦、貧困が折り重なってくる様子を歌っている。本来人間の人生というもの平穏で死別などあってはならないのに、現実の世の中は苦しい上にさらに苦しみが重なってくる。例えば痛いきずの上にからい塩をふりそそぐような苦しみがあり、重い荷物を引いて苦しんでいる荷台にさらに重い荷物を載せるような苦しみ、それは私の老の苦しみの上に重なってきている「宿痾」（間接リュウマチ）の苦しみであると言っている。「泣き面にハチ」という言葉があるけれども人生というものはそういう苦しみの連続であり、その苦しみに耐えて死が来るまでは、生きてゆかねばならず、と人生に対する諦観とも言うべき姿勢を長歌にしている。

また、「五月蠅なす　騒ぐ児どもを　打棄てては　死は知らず」と病床の枕もとで、うるさく騒いでいる子供が障害となって、この病苦から逃れる死出の旅にもなかなか出たくても出られない苦しみを歌っている。このことは憶良の辞世の記述となった八九七の前の「沈痾自哀文」に於て「生の極めて貴く、命の至りて重きことを知る」と述べているように、確かに生きることは実に素晴しいものであるがそれに伴う苦悩も詳細に述べている。

山上憶良のこのような死生観は「父母を見れば尊し　妻子を見ればめぐし愛し　世の中は　かくぞ道理」（八〇〇～八〇一）と妻子、夫婦の愛情関係が最高の社会倫理であるとの考えにも通じてくる。ここが恋愛を一つの精神的遊びとした新古今集や古今集の歌人達の歌とは異なり、現代人の心情に訴える憶良の歌の原動力がある。この憶良の人生観は、いかにして培われてきなのであろうか。

その理由として考えられるのは、遣唐使として唐に留学し、当時の儒教、仏教の洗礼を受けたためではないかと推察される。憶良自身が前にも述べた八〇二番の歌の子供達を「瓜食めば子供思ゆ……」の歌の詞書の中に釈迦如来の大衆（信者）への愛情は釈迦如来（父親）の子の羅睺羅への愛情と同じ程強いものだとの表現、子供への親の愛情は最高の物であると述べ上の反歌を歌っている。当時、日本に流入された仏教の創設者、釈迦如来の話に触れていることは相当深く仏教思想の影響を受けていることが推察される。

また「沈痾自哀文」に於ても、憶良の今までの人生についても次のように述べている。

○　われ胎生より今日に至るまで自ら修行の志あり。かつて作悪の心なし。所以に三宝を礼拝し、日として勤めざるはなく、百神を敬重し、夜としてかくこと有りといふことなし。ああはづかしきかな、我何の罪を犯してか、この重き疾に遭へる。

以上のような表現でもって、憶良自身の告白、生れて以来、何の邪悪なこともしておらずに、ただただ修業に勤め、仏法を礼拝してきたと言っている。そして仏法だけでなく、百神も尊敬し大切にしてきたと素直に彼なりの宗教観、倫理観を告白している。

ここに、初期万葉集の代表の山上憶良の仏教に対する帰依と同時に神に対する、百神にも救いを求めていたことが理解できる。仏教の倫理観と憶良本人の幼少の時から自身の心と体の中で育てた善悪の判断、それに古来から、神があらゆる物に存在するという思考が合流して憶良自身の独自の倫理、宗教観として定着して彼の人生を支えたのではないかと思われる。彼はこれほどの強い宗教心と修行をしてきたのに、これほどの重症の「宿痾」に悩まされるのかと自分を責めながらも、これほどの修行をしてきたのだから致し方ない、どうしようもないという諦観の中に我が身を置いていることがよく理解できるわけで、そこに精神に安寧の境地を見出している。また、憶良の倫理宗教観が見られるところは、前の九〇五番の古日という男子を幼少にして亡くした時の悲しみを歌った挽歌の中で「黄泉の使」なる表現をして、天国の使という意味に使っている。古事記などを見ると、古代人の私死後の世界、これを「黄泉の国」と名づけており、そこは温かい温泉が湧き出て、豊かな所となっている。憶良が仏教のみに帰依していたとすれば、「極楽浄土」なる表現を使ったと思われるが、「黄泉」なる表現を使っているのは在来の神統的発想と思われる。

つまり、結論的に憶良の倫理宗教観をまとめてみると、憶良自身の幼少より身についた倫理、宗教観に唐留学で体得した儒教、仏教それに在来の神統の倫理宗教観が合流し独自の憶良流の倫理、宗教観を形成したのである。

Ⅲ　九州太宰府に於ける大伴旅人との邂逅

この山上憶良の歌を考えるに当たって、最も重要なことは憶良が晩年、筑前守として「遠の朝廷」なる太宰府に於て二年間程の短い期間ではあったが、当時、太宰府の帥として赴任していた大伴旅人との「梅花の歌で」にみられるような文学的交流である。また山上憶良の歌人としての完成期もこの太宰府に於ける大伴旅人とも文学的交流と九州での出来事や風物とのふれ合いで熟成されたのではないかと思われる。

九州地方全体の統率を行っていた太宰府の帥であった大伴旅人は梅の花の咲く頃に代表者達を集めて、梅の花の咲く下で、歌を詠み合っていたことが習慣となっていた。この梅花の宴は唐に於ける王義之による「蘭亭集序」を参考にして始めたものだと中西氏は言っておられる。九州太宰府の地で都から遠く離れた地で旅人の考えを中心にして自然発生的に催されたと思われる。この太宰府は朝鮮半島との交流的にまつわる伝説や文化の交流の地であり、また大陸の唐との文化交流、人的文流の拠点でもあったので、異国への憧憬的歌も数多くの歌人によって歌われている。

九州での風物や伝説に触れた憶良はさらに彼の文学的境地を深めたのである。八一三～八一四番の歌にかけて、八一三番は長歌で八一四番は反歌となっているが、

○　天地の共に久しく言い継げと此の奇魂敷けらしも
（巻五・八一三）

と「筑前国怡土郡深江の村子負の原に海に臨める兵の上に二つ石あ

り……」（八一三の詞書からしてみると、神功皇后が新羅の国を平らげられた時に御心をお鎮めになると思って、お取りになった真珠のような二つの石を世の人々にお示しになって後世の人々まで語り伝えなさいと言って、深江の海のほとりの子負の原に自からの御手で置かれ、その石が今も神々しく残っている精霊の石の話にとっても感激して作った歌である。

八一四番の歌は天地とともに永久に語り継げと、この精霊のこもった石をこの地に敷いて置かれたわけだなあ。これが伝説の石かと山上憶良は伝説を証明する神功皇后の鎮懐石が目の前に存在していることに感激し歌にしている。

さらに今の佐賀県松浦地方に旅した時に、その土地での「松浦佐用姫伝説」にも感動している。「松浦佐用姫伝説」は松浦地方に住んでいた松浦佐用姫が夫の大伴佐提彦が新羅平定の長旅に船出する時に鏡山の頂上で朝鮮半島に向う船にいつまでもいつまでも巾を振っていたら、余りにも長い間巾を振り続けたために石になってしまったという肥前風土記にも見られる伝説上の人物である。その松浦佐用姫の伝説に痛く感動し次のような歌を歌っている。

○　松浦県佐用比売の子が領巾振りし山の名のみや
　　聞きつつ居らむ
（巻五・八六八）

つまり、松浦県の佐用姫が領巾を作った山の名前だけを聞いている。ぜひとも現地を見学してみたいと率直にこの話に感動していることが想像できる。

この松浦佐用姫伝説については、友人の大伴旅人が次のような歌を数首残している。

○　遠つ人松浦佐用姫夫恋に領巾振りしより負へる山の名
（巻五・八七一）

○　山の名と言い継げとかも佐用姫がこの山の上に
　　領巾を振りけむ
（巻五・八七二）

○　万代に語り継げとしこの嶽に領巾振りけらし松浦佐用姫
（巻五・八七三）

○　海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫
（巻五・八七四）

○　行く船を振り留みかね如何ばかり恋しくありけむ
　　松浦佐用姫
（巻五・八七五）

松浦佐用姫伝説に対して、山上憶良は一首、大伴旅人は五首、それぞれ貞節の誉れ高い松浦佐用姫を賞賛していることが分る。特に大伴旅人の方は佐用姫の夫の大伴佐提彦が旅人の大叔父に当ることが判明し、尚一層の感激を覚えたに相違いない。この佐用姫伝説についての旅人と憶良の合計六首の歌からしても、旅人と憶良の文学的、また個人的、また男同志の心の襞にふれるような交わりがいかに深いものであったかが理解できる。

また、梅花の宴に対して、七月七日、七夕の夜に、太宰府の帥、大伴旅人の家で七夕の宴が旅人の主宰で催され、一五一八～一五二九までに十二首、山上憶良の歌が集められている。ただ一五一八～一五一九の二首の歌については、左大臣の宅なりとの詞書がある。

左大臣とは長屋王のことで不幸にして謀反の噂のため自害に追い込まれた王であった。神亀・天平時代にかけて、世の中に不幸な事が重なり、王は儒教原理や吉凶の兆しによって物事を判断する讖緯の思想を積極的に取り入れた人で文人達を重用し、大伴旅人、山上憶良などは交流を深めている。

この七夕の伝説は古く中国で伝えられ、七月七日の夜に牽牛星（ヒコボシ）と織女星（タナバタツメ）が天の川星流を境にして年に一回の会瀬を楽しむとの伝説をもとにしたもので、当時の奈良時代に於ても、日本人の心の中にもしみ込んでいた伝説である。他にも読人知らずで万葉集にも歌われている。

山上臣憶良の七夕の歌十二首

○　天の河相向き立ちてわが戀ひし君來ますなり紐解き設けな
（巻八・一五一八）

右のものは、養老八年七月七日に、令に應ふるなり。

○　ひさかたの天の河に船浮けて今夜が君が我許來まさむ
（巻八・一五一九）

右のものは、神亀元年七月七日の夜に、左大臣の宅のなり。

○　牽牛は　織女と　天地の　別れし時ゆ　いなうしろ　川に向き立ち　思ふそら　安らかなくに　嘆くそら　安らかなくに　青波に　望みは絶えぬ　白雲に　涙は盡きぬ　かくのみや　息衝き居らむ　かくのみや　戀ひつつあらむ　さ丹塗の　小船もがも玉纒の　眞櫂もがも　朝凪に　い掻き渡り　朝潮に　ゆふべにも　い漕ぎ渡り　ひさかたの　天の河原に天飛ぶや　領巾片敷き　眞玉手の　玉手さし交へ　あまた夜も　寝てしかも　秋にあらずとも　一に云はく、秋待たずとも
（巻八・一五二〇）

反　歌

○　風雲は二つの岸に通へどもわが遠妻の　言ぞ通はぬ
（巻八・一五二一）

○　たぶてにも投げ越しつべき天の河隔てればかもあまた術無き
（巻八・一五二二）

○　秋風の吹きにし日よりいつしかと
　　わが待ち戀ひし君そ來ませる
（巻八・一五二三）

○　天の河いと川波は立たねども伺候ひ難し近きこの瀬を
（巻八・一五二四）

○　袖振らば見もかはしつべく近けども
　　渡るすべ無し秋にしあらねば
（巻八・一五二五）

○　玉かぎるほのかに見えて別れなばもとなや戀ひむ
　　逢ふ時までは
（巻八・一五二六）

○　牽牛の嬬迎へ船漕ぎ出らし天の河原に霧の立てるは
（巻八・一五二七）

○　霞立つ天の河原に君待つといかよふほとに裳の裾ぬれぬ
（巻八・一五二八）

○　天の河浮津の波音騒ぐなりわが待つ君し舟出すらしも
（巻八・一五二九）

どの歌も年に一回だけの会瀬を待ちわびている牽牛星（ヒコボシ）と織女星（タナバタツメ）の様子が旨く表現されている。前の二首は別にして、太宰府という大陸の文化の影響に染まりやすい地で、中国の故事、伝説に詳しかった憶良の文学意識を伺えるわけである。当時の太宰府を「遠の朝廷」とか「天ざかる鄙」とかいう呼び方を奈良時代ではなされているが、中央の都から遠く離れたこの地で、山上憶良はその文学的境地をさらに深め、再確認したのではなかろうか。

この旅人は妻を赴任中に亡くすわけであるが、このことに同情の念を持った憶良は日本晩歌（七九四～七九九）を旅人その人になりきって、生涯の伴侶を亡くす人生最高の悲しみを漢詩文と長短歌の連作という新形式をとって表現している。追悼文、追悼詩に加えて反歌を五首、付け加えている。

日本挽歌一首

○ 大君の　遠の朝廷と　しらぬひ　筑紫の國に　泣く子なす
　慕ひ來まして　息だにも　いまだ休めず　年月も　いまだあらねば　心ゆも　思はぬ間に　うち靡き　臥しぬれ　言はむ術　せむ術知らに　石木をも　問ひ放け知らず　家ならば　形はあらむを　うらめしき　妹の命の　我をばも　如何にせよとか　鳥鳥の　二人並び居　語らひし　心背きて　家ざかりいます
（巻五・七九四）

反　歌

○ 家に行きて如何にか吾がせむ枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも
（巻五・七九五）

○ 愛しきょかくのみかなに慕ひ來し妹が情の術もすべなさ
（巻五・七九六）

○ 悔しかもかく知らませはあをによし國内ことごと見せましものを
（巻五・七九七）

○ 妹が見しあふちの花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに
（巻五・七九八）

○ 大野山霧立ち渡るわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる
神龜五年七月二十一日　筑前國守山上憶良上る
（巻五・七九九）

七九九番の歌のあとに、筑前國守山上憶良上るとある。勿論、憶良が大伴旅人にたてまつった歌であり、二人の友情がいかに深かったかが理解できる。

七九四番の長歌に於ては九州の太宰府の地に夫に従ってついてきてそこで亡くなった旅人の妻の死を悲しんでいる。「鳥鳥の二人並び居言ひし」つまり、長年つれ添った老夫婦を、鳥鳥のつがいに譬えており、その一方が欠けることがいかに悲しいことかを歌いあげている。

また七九七番の歌に於ては、最初に「悔しかも」とああ残念でたまらない。このように妻が亡くなることが前もって分っていたならば領地の筑前の国守を旅し名所、旧跡などを案内しておけばよかったと素直に後悔の気持を述べている。私自身も何回か家族の死に遭遇したが、いつも同じ後悔にさいなまれた。

七九八番の歌では愛する旅人の妻が見たであろう梅檀の花はきっ

と散ってしまうことだろう。妻を失って私の泣く涙はまだ乾きもしないのにとても繊細な表現でもって妻を亡くした悲しみを旅人になりきって歌いあげている。梅檀の花は四国、九州に自生する大木で初夏に薄紫色の花が咲く、きっとこの歌の中の梅檀の木は太宰府の帥の官邸の中にあった木であろう。美しい梅檀の花を歌の中で表しながら、妻を亡くした旅人の気持を歌いあげている。実に絵画的な歌でもある。

七九九番の歌は六首の中では最優秀な歌で、妻を亡くして嘆く息によって、太宰府庁の裏山の大野山にかかっていた山霧が立ち渡ってゆくといかに妻を亡くした悲しみが深いものであるかを旨く上手に歌いあげている。

この友人の大伴旅人になりきって妻を亡くした悲しみを歌いあげる手法は平安朝時代の紀貫之の「土佐日記」、また近代に於ける夏目漱石の「吾が輩は猫である」に共通する。立場を変えて物事を見、それを表現する手法に共通するものを感じる。

その手法は次の筑前國の志賀の白水郎の歌十首、三八六〇～三八六九番までの歌でも見られる。神亀年中に津麿滓屋郡志賀村の白水郎荒雄の対島に向う途中の水難事故に関して、妻子の気持になって水難事故に遭って帰らぬ人となった荒雄を偲び以下のような歌を作っている。

筑前國の志賀の白水郎の歌十首

○ 大君の遣さなくに情進に行きし
荒雄ら沖に袖振る
（巻十六・三八六〇）

○ 荒雄らを來むか來じかと飯盛て
門に出で立ち待てど來まさぬ
（巻十六・三八六一）

○ 志賀の山いたくな伐りそ荒雄らが
よすかの山と見つつ偲はむ
（巻十六・三八六二）

○ 荒雄らが行きにし日より志賀の海人の
大浦田沼はさぶしくもあるか
（巻十六・三八六三）

○ 官こそさしてもやらめ情出に行きし
荒雄ら波に袖振る
（巻十六・三八六四）

○ 荒雄らは妻子の産業をば思はずろ年の
八歳を待てど來まさぬ
（巻十六・三八六五）

○ 沖つ鳥鴨とふ船の還り來ば也良の崎守
早く告げこそ
（巻十六・三八六六）

○ 沖つ鳥鴨とふ船は也良の崎たみて
漕ぎ來と聞え來ぬかも
（巻十六・三八六七）

○ 沖行くや赤ら小船につと遣らばけだし人見て
披き見むかも
（巻十六・三八六八）

○ 大船に小船引き副へ潜くとも志賀の荒雄に
潜きあはめやも
（巻十六・三八六九）

この十首の中で代表作と思われるのは三八六一番と三八六五番であろう。三八六一番の歌では、妻が愛する夫の荒雄を飯を盛り食事を作って門口に立って待っているが、愛する夫は水難事故のため一

向に帰って来ないと悲嘆にくれている妻の様子を歌いあげている。三八六五番の歌に於ては妻の言葉で、私の愛する夫の荒雄は自分達妻子のなりわいのことなど考えてはくれないらしい。なぜなら長年にわたって帰って来てくれないものと水難事故で夫を亡くした悲しみを妻の立場になって率直に歌いあげている。

このように、筑前国守として赴任した二年間は憶良の晩年にとって、九州各地での伝説や古事来歴を訪ねることができ充実したものであったわけで、彼の作歌に勢いをつけたのが大伴旅人との運命的邂逅であった。

大伴旅人は太宰府の帥、山上憶良は筑前国守と身分の上下はあるものの、憶良の遣唐使として留学し唐の文学に精通していたことは大伴旅人の歌に大きな影響を与えている。太宰府で職階的な中心は大伴旅人を中心にして、しかし文学的才能の点では山上憶良を中心にしての文学サロン、筑紫歌壇とも言うべきサロンが自然に生れたのである。

その代表的なものが、梅の花が咲く頃に催された、「梅花の宴」であった。参加者は九州各地からの三十二名、主な歌人は中心の旅人、憶良、小野老、沙弥満誓、大伴坂上郎女などである。この風流な遊び「梅花の宴」は唐の王義之の「蘭亭集序」をまねしたのではないかと中西進氏は指摘されているが、「遠の朝廷」「天ざかるひな」にあって、遠く都を思い帰京の念にかられた文人達の自然な遊びではなかったかと思われる。

この「梅花の歌三十二首併せて序」として集められている。主人である旅人、山上憶良、沙弥満誓の歌は次の通りである。

○　わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも
（巻五・八二二番　旅人作）

○　春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮さむ
（巻五・八一八番　憶良作）

○　青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし
（巻五・八二一番　沙弥満誓作）

この「梅花の宴」の主人の旅人の歌は非常に絵画的な表現でもって、寒い日に梅の花の散りゆく様をまるで雪が大空から流れてくるように美しいと歌っている。沙弥満誓の八二一番の歌については青柳の花と梅の花とを折って、かざしにして、酒を飲んだ後には二つの花は散ってしまってもよい。この花をかしらにかざす習慣なども唐の習慣を見習ってのことだったのではないかと推察される。他の三十首に近い歌も梅の花の美しさをよく歌っており、梅の花の持つ清楚な美しさを寒空の中に美しく歌いあげている。「梅花の宴」にて食された料理を太宰府の歴史資料館で昨年、拝見したのであるが、鹿、猪、鮎などの素材で、万葉人の公式料理の豪華さが分り感激を覚えたわけである。憶良の歌については後の部分で述べることにする。

旅人と憶良との友情を深めた契機は、旅人の長年つれ添った妻の大伴郎女との死別であったと思われる。太宰府の帥として赴任してのすぐの出来事で旅人の心の動揺ぶりがその挽歌などから推察できる。三首程あげてみる。

神亀五年戊辰、太宰帥大伴卿、故人を思戀ふ歌三首

○　愛しき人の纒（ま）きてし敷栲（しきたへ）のわが手枕を
纒く人あらめや
（巻三・四三八）

右の一首は、別れ去にて數旬を經て作る歌。

○　還るべく時は成りけり京師にて
誰が手本をかわが枕かむ（巻三・四三九）

○　京なる荒れたる家にひとり寝は
旅にまさりて苦しかるべし（巻三・四四〇）

四三八番の歌はいとしい妻の郎女が枕にした私の手枕を、枕にして共に寝る人がまたとあろうかありはしない。以上のように愛妻の郎女が亡くなった以上、二度と愛すべき妻を持たないとの決意を述べている。四三九～四四〇番に到る二首でも同じ悲しみを歌いあげている。

また次の七九三番の歌に於ても、旅人は妻の朗女を亡くした悲しみを、凶問に報ふる歌一首として歌っている。

太宰帥大伴卿の、凶問に報ふる歌一首

禍故重疊、凶問累集す。永に崩心の悲しびを懐き、獨り斷腸の泣を流す。但し両君の大きなる助に依りて、傾命をわずかに繼げらくのみ。筆の言を盡さぬは、古今、嘆く所なり。

○　世の中は空しきものと知る時しいよいよ
ますます悲しかけり
（巻五・七九三）

この七九三番の歌の詞書に於て、妻の死に対して、「独り断腸の泣を流す」、つまり旅人が愛妻の郎女の死に際し一人で腹綿のちぎれるばかりの悲しみの涙を流していることが分る。また次に、「但し両君の大きなる助に依りて、傾命をわずかに継げらくのみ。」、つまり二人の友人のおかげで、妻の朗女を亡くした悲しみでもって傾きかけた自分の命、ある時は自ら命を絶つことも考えたのであろうか、その傾きかけた命をどうにかして生きながらえさせることができたと述べている。二人の友人、岩波古典系万葉集などの上記の注を見てみると、この二人は不明と書いてある。この二人のうちの一人それは山上憶良に相違ない。あとの一人は沙満誓などではなかったのかと思われる。とにかく山上憶良の友人として公私にわたる助けがあればこそこの悲しみを乗り越えられたと旅人は率直に詞書に於てその心情を偽ることなく述べており、次の七九三番の世の中、つまりこの世の中、そして妻郎女を亡くしてしまったこの世の中は空虚そのもので、ますます悲しみが深まるばかりであることを歌いあげている。

以上のことから推察して、また前にも述べた日本挽歌の七九五～七九九番の大伴旅人になりきっての妻を亡くした悲しみの挽歌などからして、旅人と憶良との友情の深さは後世の我々研究者の想像を超える程の深い結びつきであったのではないか。二人の友情は都から「遠の朝廷」、「天離るひな」と呼ばれていた太宰府の地で結びついたのである。旅人にとって、憶良は友人であると同時に文学上の恩師、師匠とも言うべき存在だったと思われ、作風も憶良に類似してきている。

恐らく、山上憶良の最晩年の辞世の歌になるであろう、九七八番の歌、宿痾（関接リュウマチ）に苦しみながらの歌であることがその詞書より想像される。

山上臣憶良の沈き痾の時の一首

○　士（をのこ）やも空しかるべき萬代（よろづよ）に語り繼ぐべき名は立てずして
（巻六・九七八）

右の一首は、山上憶良臣の沈き痾の時に、藤原朝臣八束、河辺朝臣東人をして疾めるさまを問はしむ。ここに憶良臣、報の語己にをはり、しまらくありて涕（なみだ）を拭ひ、悲しび嘆きて、この歌を口吟ふ。

若い時から決して官位に恵まれることはあまり少なく、憶良の人生に於て、川島皇子の側近となったり、筑前国守として少し日の目を見たくらいであったが、この歌をよく読んでみると死を前にしての彼の無念な気持が表われている。一生の出来事が走馬灯のように頭をかけめぐっての歌であると思われる。百済からの帰化人として卑しい身分から官界へ、唐への七年間に及ぶ留学、そしてまた官僚への復帰、決して後世に男として名は残せないままに死してゆかねばならない無念な気持、しかしその裏側には、天から与えられた境遇の中で直一途に自分を磨き続けたのにという諦めの気持が合流しての歌ではなかろうか。

このようにして見てみると、憶良の文学、歌の世界はとても人間臭いものであった。志は高く持ちながら体は俗世界にいる。

○　意気は青雲の上に揚れども、体はなほ塵俗の中にあり

この言葉に象徴される一生が憶良の一生で、旅人との交流は武人の旅人を文人の憶良が助け補うような形で深まったのであろう。憶良のすべての歌を読んでみると、常に苦しんでいる相手の苦しみや悲しみのよく分る、そういう人物のような気がする。日本挽歌に於ては妻を亡くした旅人になりきって、筑前国志賀白水朗歌十首に於ては妻を亡くした妻子の立場になって、その悲しみを歌いあげている。貧窮問答歌に於ては、自分自身の小官僚としての貧しい生活ぶりだけではなく自分の領民の苦しい生活にも心より同情している。

Ⅳ　結びに

官僚としては決して恵まれた地位には就けなかった、山上憶良であったが、その独自の学識、旅人との公私に亘る交流、それに伴う両者の歌数の増加によって万葉集を代表する歌と称されるようになった。しかし、この山上憶良に対する後世の研究者達の評価は一定しておらず、その歌の素材があまりにも人間的すぎるが故に風雅を重んじる平安朝以後の研究者からは少く扱われてきた。しかし、明治以後、その人間臭さ、人間としての高い倫理性、人道主義が斉藤茂吉先生などに高く評価され、また近代化を唱え、西洋列国に追いつかんとする明治以後の時代に於て、家族の尊厳、人道主義は欠くべからざる教育の柱だったわけで、憶良の歌は教科書に取りあげられるようになった。

決して官僚として恵まれなかった憶良、晩年は宿命の病気「宿痾」の激しい痛みを耐えながらの太宰府での勤務、「梅花の宴」に於る八一八番の歌、春になるとまず最初に自分の庭に咲き始める梅の花を一人静かに少しは酒でも呑みながらながめ、心静かに春の一日を過しましょう。この和歌に彼の人生は尽きると思う。人生の苦難を越えての晩年のほんの少しの間の安寧の時、それが旅人との交流だったのではないだろうか。

参考文献

○　作者別万葉集　桜風社
○　万葉集・一～四（日本古典文学大系）　岩波書店
○　万葉集秀歌上・下　岩波新書
○　万葉集辞典　学燈社